

口述筆記翻訳の中で

本論

今回は、仏典漢訳における翻訳者教育について述べてみたい。特に、実地での教育、また、見学による教育について見てみたい。

ここで教育とは、養成的なものと研修的なものの両方を含めることにする。すなわち、翻訳者になるための教育と、翻訳者としての質を高めるための教育である。

また、翻訳者とは、広い意味で考え、翻訳にコメントを加える者、あとから原文照合をする者等も含めることにする。

仏典漢訳は、口述筆記という方法でなされた。すなわち、翻訳者が原文を手にとって口頭で Chinese に訳し（あるいは原文で読まれるものを聞いて口頭で訳し）、筆受と呼ばれる者がそれを筆記した。そして、ほとんどの場合、かなりの数の列席者がいた。水野（2004）は、竺法護と真諦の場合は列席者がいなかったと述べているが、これは例外的な場合であり、それ以外の場合には、数十人から数百人の列席者がいた。

列席者の数と役割は時と共に変わってきているが、少なくとも、翻訳に対してコメントを加えるものと、翻訳の様子をみて、そこから何かを学ぼうとするものは常にいたものと思われる。一時期、口述筆記翻訳の現場は一般対象の法話の要素も兼ね、そのような場合にはかなり多くの者が列席していたが、このような要素はここでは除外して考える。出三蔵記集経序を見ると、翻訳者の同僚と思われる者も列席していて、翻訳がよい悪いのと、いろいろとコメントを加える場面が多く出てくる。つまり、先輩、後輩、同僚が列席していたわけである。ただし、そのうち一部が欠けることもあったかもしれない。

仏典翻訳がどのようになされたのかを知る主な史料は、出三蔵記集の経序の部分、そして、訳経にかかわった僧侶の伝記（僧伝）である。宋高僧伝の中の宋賛寧の伝記を見ると（仏典のサイトにもあるし、また、Cheung の著には英訳があるし、さらにまた、水野はその部分を、説明的に述べている）列席者の役割分担が詳しく書かれているが、これは後期の状況であり、初期においてはもっと簡単であった。ただ、サンスクリットの原文を読み上げるものがいたという記述は注目すべきである。仏典漢訳のときいつも原文が朗読されたかどうかはわからない。しかし、原文朗読という習慣が次第に定着していったと

いうことはできるであろう。出三蔵記集経序 9 - 17 にも、「・・・に請い、原本を手にとらせ、口頭で梵音を宣べさせた。」とある。もし原文朗読がないと、コメントも、原文と比べてどうかということはいえなくなり、訳文のよしあしだけを扱うということになってしまうであろう。

また、翻訳協力者の中には、口述筆記が行われる場所での協力者と、とりあえず訳ができてからあとの、訳文改善（原文照合を含む）の協力者があったわけであるが、ここでは現場にのみ注目する。

さて、翻訳を始めて間もない者にとっては、原文の解釈や訳文の表現について、いろいろとコメントを加えてくれる者がいるということは、翻訳の腕を上げる上で、非常に助けになったものと思われる。五失本三不易という翻訳原則を記したものが出る前は、翻訳一般論にかかわる議論もいろいろとなされたことが、出三蔵記集の経序の部分からも知られるが、五失本三不易が出てからは、コメントの提出やコメントの検討は、それ以前よりも短時間で、効果的になされたものと思われる。

また、列席者の中には、これから翻訳者になろうとする者もあったと思われる。そのような者にとっては、口述筆記翻訳の場に列席すること自体が、翻訳教育となったものと思われる。単に翻訳作業を聞いているだけでは退屈したかもしれない。しかし、翻訳作業中に、翻訳者の原文解釈の間違いの指摘や、別訳の提案をする者もあったと思われる。そのような言及は、列席者の興味をも引くものであったに違いない。

このように、口述筆記翻訳という方法は、翻訳と同時に翻訳者教育をも行うというものであったことは注目されるべきであろう。

口述筆記翻訳は、翻訳者教育も兼ねていると考えると、かなり経済的な翻訳方法ということになるかもしれない。

（なお、仏典漢訳の翻訳者の教育は、もちろんここで述べたことに尽きるわけではない。たとえば、サンスクリットの教育もある。翻訳現場以外での教育についてはここでは取り上げなかった。）

実験での検証の可能性

口述筆記翻訳の簡単な実験をやってみた記録については、「東洋の翻訳論」で書いたとおりである。しかし、それは翻訳に関する実験であり、翻訳教育に関する実験ではなかった。そのため、口述筆記翻

訳の教育的効果については、改めて別の実験を試みる必要があるであろう。

ここでは、その実験のアウトラインを述べてみたい。すなわち、以下のような方法で行う。(英文和訳とする。)

翻訳者は、コンピューターに映し出される原文を口頭で翻訳する。それを、助手が、コンピューターに打ち込む。打ち込んだ結果は翻訳者にも見えるようにする。また、翻訳の原文と訳文は、列席者全員に見えるようにするため、スクリーンに映し出す。英語の専門家と国語の専門家(作家等)には同席していただき、訳し方がおかしいと思ったとき、間違っていると思ったときなど、自由にコメントしていただく。

場所代のみならず、使用機器の費用もかかり、全体として相当の費用がかかると思われるかもしれない。しかし、列席者からは、翻訳研修費との名目で費用を徴収することが可能と思われる。仮に 1000 円×100 人としても、100,000 円ということになり、協力者へのお礼まで考えると、赤字であると思うが、その部分を何らかの方法で埋めることができれば、可能であろう。

なお、簡単にやろうとすれば、参加者は最低の 3 人とし(翻訳者、コンピューター打ち込み担当者、列席者)、原文はコピーで供給し、コンピューターも 1 台だけ使用とすることも可能であると思う。

教育的効果を見るということであれば、少なくとも半年ぐらい続く実験をすべきであるという考えもあるであろう。しかしその場合も、まず 1, 2 時間の実験を試みて、長期的実験をする価値があるかどうかを検討すべきであろう。一日の実験も、それなりの価値はあると思う。

なお、50 人程度を同席させて、翻訳と翻訳教育を同時にやろうとすれば、翻訳の出版前に原稿が外部に出て、海賊版が出るということもありうる。そのため、海賊版が出て支障ないものを使うとか、あるいは翻訳作業の一部のみ多人数の同席を認める等、適当な方策を考えるべきであろう。

付記

ロシア語の同時通訳などで活躍された米原万里が口述翻訳についても書いているので、参考のため、以下に引用しておきたい。仏典漢訳の場合とは状況は異なるが、貴重な記録である。「打ちのめされるようなすごい本」(文藝春秋、2006 年) p. 54~55 には、米原が、大江健三郎の「取り替え子チェンジリング」を友人(ロシア人)に口頭翻訳(すなわち口述翻訳。筆記は含まれていないので、口述筆記翻訳ではない)したときのことが以下のように記され

ている。

「聞き手の彼女が私のロシア語をいちいち直しながら、解釈そのものに異議や新解釈を持ち込んでくれたのが楽しかったし、共鳴効果で感動が倍加するのも新鮮だった。」(p.54)

「彼女の久しぶりに晴れ晴れとした笑顔を見て、これはもしかして、翻訳のあり方の理想の形なのではないか、と思えてきた。本が書かれた言葉を母語とする者と翻訳される言葉を母語とする者の共同作業があって初めて十全な翻訳が可能になるのではないか、と。」(p.55)

もちろん状況により、特にコメントを加えるものがあるかないかにより、翻訳進行の様子、効果等が異なってくることはいうまでもないであろう。

参考文献

- 北村彰秀「続 東洋の翻訳論 学者基本典を中心として」ウランバトル、2008 年
- 北村彰秀「東洋の翻訳論 蔵蒙対訳『学者基本典』を出発点として」ウランバトル、2010 年
- 「国訳一切経 和漢撰述部 31 史伝部一 出三蔵記集」東京、1950(初版)、2000(改訂三版)。
- 中嶋隆蔵編「出三蔵記集 序巻訳注」京都、1997。
- 水野弘元「経典はいかに伝わったか 成立と流伝の歴史」東京、2004 年
- Baker, M.(ed.) :Routledge Encyclopedia of Translation Studies, Oxon 1998.
- Martha Cheung (ed.) An Anthology of Chinese Discourse on Translation vol. 1, Manchester, 2006.

筆者メールアドレス

a_kitamura07@yahoo.co.jp